

## 「新しい契約」と聖霊

### ベレーシート

●今年の4月21日の復活祭記念礼拝では「復活のからだ」とは何かということについてメッセージをしました。何ゆえに「復活のからだ」が必要なのかということ。それは、天の御国に入る(=御国を受け継ぐ)ためには、死んだ者も生きた者も、「復活のからだ」に変えられなければならないこと。イエシュアの復活はその初穂なのだということをお話ししました。今日(6月9日)は、その日から**50日目(=五旬節、ペンテコステ)**に当たります。この日に**約束の聖霊**が注がれたのです。これは神のご計画において画期的な出来事であり、新しい時代の幕開けでした。使徒パウロは、聖霊によって「**証印を押された**」者は、同時に「**御国を受け継ぐことの保証**」でもあると述べています(エペソ 1:13~14)。

●「証印を押された」と訳された「スフラギゾー」(σφραγιζω)は「主の所有として守られている」ことを意味し、「保証」と訳された「アポリュトロシス」(ἀπολύτρωσις)は「御国の祝福を受け取る手付金」という意味です。つまり、「御国のすべての祝福にあずかる保証をすでに受け取っている」という意味です。父なる神は、私たちを選び、神の子どもとすることを計画し、御子がそれを実現しました。そして聖霊は、御子が実現した救い(贖い)を私たちに個別的に与えてくださる方なのです。このことを「聖霊によって証印を押された」とパウロは表現しています。「聖霊によって証印を押される」とは、神ご自身が、私たちが正真正銘、神の子どもであることを証明し、私たちが間違いなく神の所有(もの)であることを証明し、神の子とされた私たちがこの地上生活におけるあらゆる危険や誘惑から守られることを保証し、将来的には完全な御国を相続するという保証を意味しています。ただし、この祝福をいただくためには、「救いの福音を聞いて、それを信じる」ことが条件です。当初は、まずユダヤ人がこの聖霊の証印をいただきましたが、今やすべての異邦人も福音を聞いて信じるなら、同様の祝福を受けることができるようになっているのです。そのことはすでに実現しています。しかしいまだその祝福のすべてを経験していません。それを経験するときは、キリストの再臨によって「復活のからだ」(御霊のからだ)が与えられるときです。それは同時に「**新しい契約**」が成就・実現するときなのです。聖霊について学ぶべきことは多くありますが、今回は「**新しい契約**」と「**聖霊**」について学んでみたいと思います。

### 1. 「新しい契約」について

#### (1) 「新しい契約」はすべての契約を総括する

●新約聖書で「新しい契約」ということばは、イエシュアが最後の晩餐で弟子たちに語った 2箇所(ルカ 22:20、I コリント 11:25)と、使徒パウロが預言者エレミヤの語った「新しい契約」を引用して語って

いる5箇所(Ⅱコリント3:6、ヘブル8:8, 13, 9:15, 12:24)です。エレミヤが「新しい契約」ということばを使っている箇所は旧約でも31章31節の1回しかありませんが、これは「御国の福音」の内実を意味する極めて重要な究極の契約なのです。古い契約も動物の血によって結ばれていますが、新しい契約も同様にイエシュアの血によって結ばれた契約なのです。契約が有効となるためにはいけにえがささげられなければなりません。そこでイエシュアは最後の晩餐で、

【新改訳2017】ルカの福音書22章20節

食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

【新改訳2017】ヘブル人への手紙9章15節

キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約(=シナイ契約)のときの違反から贖い出すための死が実現して、召された者たちが、約束された永遠の資産を受け継ぐためです。

## (2) 「新しい契約」はエレミヤが預言していた

●「新しい契約」は「古い契約」とは根本的に異なります。古い契約は神の民が神の律法に聞き従ってそれを守るならば祝福が、守らなければのろいをもたらされるというものでした。エレミヤはバビロン捕囚の前に遣わされた預言者です。エレミヤは契約における人間の限界を見据えた預言者でした。同時に人間の限界の向こう側に希望があることを啓示された預言者でもあるのです。その「新しい契約」はエレミヤ書31章31～34節にあります。どのような面において希望があるのかを見てみたいと思います。

## 2. エレミヤ書31章に記されている「新しい契約」とは

【新改訳2017】エレミヤ書31章31～34節

31 **見よ、その時代が来る**——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。

32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。

33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らが見な、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

●「新しい契約」は「エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない」とあります。「エジプトの地から導き出した日に結んだ契約」とは「シナイ契約」のことです。その契約によってイスラエルの民はのろわれて捕囚の民となってしまいました。しかし「新しい契約」ではそのような結果をもたらさないことが語られているのです。なぜなら、その新しい契約はイエシュアの仲介によって結ばれ、

聖霊によって履行される新しい契約だからです。「新しい契約」の特徴をエレミヤは述べています。

### ① 心に律法が記される

●33 節に「わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す」とあります。それは外からの義務や強制によるものではなく、内からの意志(自発性、主体性、自立性)によって神の律法(トーラー/みおしえ)を守り、従おうとすることができるというものです。古い契約では神の律法を守るように命じますが、その力は与えられませんでした。しかし新しい契約では御霊に仕えることによって神の律法が全うされるのです。使徒パウロはⅡコリント人への手紙の中で次のように語っています。

【新改訳 2017】Ⅱコリント書 3 章 6 節

神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

●エレミヤ書 31 章ではその力が何によって与えられるのかは示されていませんが、使徒パウロが言っているように、それが御霊によってであることが分かります。この契約の仲介者であるイエシュア自身が聖霊によって誕生し、聖霊によって神のわざをなした方だからです。聖霊によって、はじめて契約の根幹である「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」ということが可能となるのです。

### ② 主を知るようになる

●34 節に「『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ。」とあります。「身分の低い者から高い者まで」というのは「メリズモ法」というヘブル語特有の修辞法で、「すべての者」を意味します。その日には、つまりメシア王国ではすべての者が直接的に主を知るようになります。エゼキエルは、神が「新しい霊」を民に与えることでそれが可能となることを語っています(37 章)。「主を知る」という「知る」はヘブル語の「ヤーダ」(יָדָה)で、主を親しく知ること、すなわち、「主を愛すること」と同義です。そのように、御霊によって**主を愛するようになる**のです。

### ③ 完全な赦罪<sup>しやざい</sup>

●34 節に「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」とあります。「もはや」の部分新改訳第三版では「二度と」と訳されています。つまり、完全な赦罪があるということです。これは本来契約関係においては絶対にあり得ないことなのです。律法なしの契約というものはありません。律法は良いものであり、正しくなければなりません。しかもその律法には契約の内容が記されています。問題はそれを守り切れないという人間側の矛盾性にあります。使徒パウロもそのことで悩みました。

ローマ書 7 章にはこの矛盾と葛藤の悩みが記されています。ところが「新しい契約」における罪や咎に対する神の赦しは、「もはや(二度と)思い出さない」(記憶しない)という驚くべき恵みにあるのです。主にある者たちが「良心に対する罪の責め」から解放されることで、自分に与えられている御霊の力によって神に対してより創造的に生きる力が得られるのです。

### 3. 「新しい契約」にあずかる者

●エレミヤ書 31 章 31 節の「新しい契約」は本来、**イスラエルの家およびユダの家**に対して預言された契約です。ところが、ユダヤ人がイエシュアをメシアであると信じなかったために、異邦人に対して向けられることとなります。このことも福音がすべての人に届くための神の隠された戦略でした。

●このことは主の例祭として制定されている「七週の祭り」の中にすでに啓示されていました。「七週の祭り」で重要なことは、**主を礼拝する者たちが、パン種の入ったパン(大麦ではなく、小麦で造られたパン)をそれぞれ「二個」、祭司のもとに持って来なければならないこと**でした。「二個」です。「一個」ではだめなのです。なぜ「二個」なのか、その真意は長い間、隠されたままでした。しかし約束の聖霊が注がれたことによって、この例祭の奥義が明らかにされたのです。「二個」とは、ユダヤ人と異邦人、すなわち「教会」のことです。ユダヤ人にとっては未だ依然として隠されたままです。時系列では、この「新しい契約」はまず教会と結ばれ、その後でイスラエル全家の残りの者と結ばれることになるのです。

#### (A) 教会の構成メンバー

●聖霊によってイエシュアをキリストと信じた**ユダヤ人(メシアニック・ジュー)**と**異邦人**。

#### (B) イスラエルの構成メンバー

●教会が携拳された後に、反キリストの大患難の試練を通して、聖霊によってイエシュアをキリストと信じた**イスラエルの残りの者たち**。

●いずれにしても、新しい契約によって永遠に御国において生かされるためには、聖霊の働きが不可欠です。そのスタート点がペンテコステの聖霊降臨の出来事であり、その完成はキリストの再臨の出来事なのです。ですから、今は**聖霊の時代**だと言えるのです。教会にとって、御国の完成はキリストの空中再臨であり、携拳によってそれが実現します。イスラエルの残りの者に対しては、キリストの地上再臨の前の反キリストによる大患難において「恵みと嘆願の霊」(ゼカリヤ 12:10)が注がれることによって実現します。キリストが地上再臨されて「メシア王国」(千年王国)が始まるときには、携拳された教会とイスラエルの残りの者が**御国の共同の相続人**となるのです(エペソ 3:6)。これは奥義として旧約時代には隠されていました。

### 3. 「見よ、今は恵みの時、今は救いの日です」

●聖霊について学ぶべきことはまだまだ多くありますが、私たちは神のご計画においてとても幸いな時代に生かされているのです。パウロは言っています。「見よ、今は恵みの時、今は救いの日です」(Ⅱコリント 6:2)と。なぜなら、私たちは聖霊の時代に生かされているからです。

【新改訳 2017】ローマ書 8 章 1~4 節

- 1 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。
- 2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。
- 3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。
- 4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」

●なぜ、「今は恵みの時、今は救いの日」なのかといえば、キリスト・イエスにある「**いのちの御霊の律法があなたを解放したから**」なのです。これはどういうことでしょうか。新改訳改定第三版では「**いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放した**」とあります。つまり、新改訳 2017 訳で「律法」と訳された言葉はいずれもギリシア語の「ノモス」(νόμος)で、「原理」「法則」という意味があります。このことを知るために、パウロはローマ書 7 章で以下のように自分の心の葛藤を記しています。

【新改訳 2017】ローマ書 7 章 18~25 節

- 18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。
- 19 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。
- 20 私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。
- 21 そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという**原理**を、私は見出します。
- 22 私は、内なる人としては、神の**律法**を喜んでいますが、
- 23 私のからだには異なる**律法**があって、それが私の心の**律法**に対して戦いを挑み、私を、からだにある**罪の律法**のうちにとりこにしていることが分かるのです。
- 24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。
- 25・・・この私は、心では神の**律法**に仕え、肉では**罪の律法**に仕えているのです。

●パウロの心のうちには二つの律法、つまり二つの原理(法則)が対決しているのです。それは**御霊の法則**と罪と死をもたらす**肉の法則**の対決です。ここで大切なことは、**法則ということは、私たちの意思や努力とはかかわりなく常に働いている力です。**時には私たちが肉の法則に反して、自分の意思と努力でそれを阻むことができます。しかし私たちがそれに疲れてしまう時、その法則の力にはかないません。ところが感謝なことに、御霊も法則なのです。私たちが自分で努力しなくても、御霊の法則にゆだねるなら、その法則は私たちのうちに働くのです。たとえば、神の律法に従うことは本来の肉は嫌うのです。神に従おうとすればするほど、肉の力は反比例するのです。なぜなら、肉の思いは神に対して反抗するからです。ところで私たちが神の律法に従いたいと思うときには、そこには肉の法則ではなく、御霊の法則が働いてい

るのです。主にある私たちはそのことに感謝すればよいのです。本来、肉にある自分にはできないことをしているわけですから。もし神を喜ばせているとすれば、そこには肉に支配されている自分ではなく、御霊に導かれてそうしているにすぎないと考えなのです。もし自分の努力で神を喜ばせていると考えるなら、それが続かなくなってしまうとき、自分が情けなく思ってしまい、自分が神の子であることに自信喪失してしまうのです。私たちの頑張りや努力では神を喜ばすことができないことを悟って、御霊の法則にまかせることを学ぶべきなのです。

●イエシュアを信じるまでは、肉の法則に従っていました。しかしイエシュアを信じる時、それまではなかったもう一つの法則が働き始めるのです。自分のうちに御霊の法則が働いていることを絶えず信じることです。「**肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるため**」とあります。これこそ「新しい契約」の真髄であり、目的なのです。律法の要求は古い契約でも新しい契約でも何ら変わっていません。同じです。しかしそれに対処する方法が異なっているのです。これは古い契約にはなかったものなのです。御霊の法則という新しい法則が働いているのです。それに気づかされる時、「今は恵みの時、救いの日」と言えるのだとパウロは言っているのです。

●礼拝すること、神のことばを聞く恵みにあずかっていること、神のみこころを知ることに喜びを感じる心が少しでもあるなら、そのことを神に感謝しましょう。肉の自分にはできないことなのです。神のことばをもっと知りたいと思う心が与えられているなら、そのことも神に感謝しましょう。肉が支配するところではそのようなことはあり得ないからです。それは御霊が働いて下さっている証拠なのです。神のみことばが理解できた時、感動するとき、そこに御霊が働き、導いて下さっていることを感謝しましょう。神の贖いの究極は、御霊に完全に支配されることです。その祝福の一部を今私たちは味わっていますが、完全に支配されるのは、私たちのからだ**が御霊のからだに変えられるとき**です。それが必ず実現する時が来ることを信じながら、今は御霊に満たされることを切に追い求めたいものです。

## ベアハリート

●御霊はイエシュアを信じる者に常に親しく寄り添ってくださり、私たちを助け、慰めてくださいます。どんな罪の中にあっても自分の力でもがくのではなく、聖霊の助けが法則として備えられているのですから、その方により頼みましょう。そうするなら、御霊があなたを導かれるのです。

●最後ですが、**神のみこころを祈る御霊の祈り**があります。それは「**異言による祈り**」です。多くの奥義を悟ったパウロ自身は「私は、・・だれよりも多くの異言で語っていることを、神に感謝しています」(Iコリント 14:18)とも「また、異言で語ることを禁じてはいけません。」(同、14:39)とも言っています。「異言による祈り」は神に向かって祈る祈りで、自分も他者も理解できないのですが、確かなことは、異言の祈りは御霊が神のみこころにそって祈る祈りなので、隠された神の奥義が開かれるのです。この異言の祈りを求めたいという人は後で個人的に申し出てください。いずれにしても、やがて来るメシア王国では「私たちの心の奥底から、生ける川が流れ出るようになる」と主は約束しています。